

全国アナウンサー音声調査の結果報告

～アクセント辞典改訂専門委員会（第4回）から～

メディア研究部（放送用語） 塩田雄大

アクセント辞典改訂専門委員会（第4回）の概要を報告する。

この回では、全国のNHKアナウンサーを対象にした音声調査の結果を報告し、それに対して委員の方々から助言をいただいた。

音声調査の実施概要

今回の改訂に関して全国アナウンサーに実施する調査としては、2回目にあたるものである。1回目の調査は、現行のアクセント辞典について、各回答者（アナウンサー）が、何らかの改訂（アクセントの変更・追加・削除など）が必要だと考える項目を指摘するようにした形式である（『放送研究と調査』2009.2参照）。それに対して今回のものは、各回答者（アナウンサー）が音声を取った上で、そのアクセント型に対して放送での使用適否について答えるようにしたものである。

調査期間：2009年10月5日～11月13日
調査対象：NHKアナウンサー 493人
有効回答：471人（95%）
調査方法：イントラネットによる音声聴取
および適否判定
調査語数：3,021語（6500アクセント型）

調査語については、第1回調査で何らかの指摘があった約1万2千語のうち、指摘件数の多かったものを中心に3,021語選定した。

アクセント型については、現行版に掲載されているものに加えて、追加を検討すべき新しいアクセント型も調査した。

調査対象語数がたいへん多く、各回答者がすべての設問に回答するような形式では負担が大きすぎると判断された。そのため、設問群を20に分割し、また回答者群も20グループに分けて、それぞれ分担して回答するような設定を行った。

まず、全アナウンサーを、1～20の20グループに分けた。各グループの構成に関しては、若年層（23～34歳、約200人）／中年層（35～44歳、約180人）／高年層（45歳以上、約120人）の3年代ができるだけ均等になるよう配慮した。

【内訳】
回答グループ
（1～20）：それぞれ約25人
設問群
（1～20）：それぞれ約151語
（約325アクセント型）

各回答者は、イントラネット上で示される文字表記画面を見ながら、それにあわせて再生される読み上げ音声を聴いて、そのアクセント型が放送で使うのにふさわしいかどうかを回答するようになっている（次頁画面イメージ参照）。

の「要検討語」となりうる項目を抽出する。具体的には、以下のような要件 (α または β) に該当するものを対象とした。

α . 現行のアクセント辞典での提示順と、今回の調査結果における「○」の回答割合の多さの順序が、異なるもの

たとえば、「まさかり」は現行アクセント辞典では以下のように掲載されている。

マ/サ\カリ, マ/サカリ→

ところが、調査結果では以下のようになった。

マ/サ\カリ : ○ 13% × 87% ☆ 0%

マ/サカリ→ : ○ 100% × 0% ☆ 0%

つまり、現行で最初に提示されているアクセント型 (=A) への支持率 (=13%) よりも、2番目のアクセント型 (=B) への支持率 (=100%) のほうが、圧倒的に高いのである。「○」の回答割合の多さに着目すれば、「BA」という順序になっている。

また、たとえば「支え」は現行アクセント辞典では以下のように掲載されている。

サ/サエ\, サ/サエ→, (サ/サ\エ)

ところが、調査結果では以下のようになった。

サ/サエ\ : ○ 72% × 28% ☆ 0%

サ/サエ→ : ○ 56% × 44% ☆ 0%

サ/サ\エ : ○ 64% × 36% ☆ 0%

つまり、「○」の回答割合の多さに着目すれば、「ACB」という順序になっている。

こうしたものは、アクセント改訂の対象語になりうるかと判断し、「要検討語」とした。

β . 現行のアクセント辞典に掲載されたアクセント型のうち、2番目以降に示された型の「○」の率が極端に低いもの

たとえば、「占い」は現行アクセント辞典では以下のように掲載されている。

ウ/ラナイ→, ウ/ラナ\イ

調査結果では以下のようになった。

ウ/ラナイ→ : ○ 92% × 8% ☆ 0%

ウ/ラナ\イ : ○ 8% × 92% ☆ 0%

この場合、中高型の「ウ/ラナ\イ」は、伝統的なアクセント型なのであるが、それにしてもアナウンサーからの支持率が低すぎると考えることができる。

こうしたものも、アクセント改訂の対象語になりうるかと判断し、「要検討語」とした。

ここでは便宜的に、第二アクセントの支持率が第一アクセントの支持率に比べて10分の1以下の数値であるものを、対象として選定した。

上記のような仕分けの結果、2,347語のうち、「要検討語」として1,463語が抽出された。

1.3 「要検討語」を

「変化類型」別に分類する

それぞれの「要検討語」がどのような「アクセント型の変化」としてとらえられるのかを考えてみる。ここでは、便宜的に以下のような考え方を採用した。

たとえば、さきほどの「まさかり」の例を取り上げると、現行アクセント辞典で1番目に掲げられているアクセント型は、中高型②「マ/サ\カリ」である。

いっぽう、調査結果で「○」の回答率の一番

多かったアクセント型は、平板型 [マ/サカリ→] である。

この場合、「まさかり」は「中高校から平板型へ」というアクセント型の変化としてとらえることにする。

つまり、「△△型から▲▲型へ」(△△⇒▲▲) という場合、「△△型」は現行アクセント辞典での第一アクセント型、「▲▲型」は調査結果で一番支持率の高かったアクセント型のことを指すことにしておく。

加えて、「支え」の例を取り上げてみると、アクセント辞典では「ABC」の順で掲示されているのに対して、調査結果では「ACB」の順と

なっている。こうしたものは、第二アクセント型(ここでは平板型)と第3アクセント型(ここでは中高校②)の関係に着目して、「平板型から中高校へ」と解釈することにする。

また、さきほどの「占い」の例については、調査結果で平板型の支持率が圧倒的に高くみられたが、この平板型はすでに現行アクセント辞典でも第一アクセントとして示されている。こうしたものは、「中高校の衰退」という形で表すことにする。

たとえば、法則番号「1」(和語の単純名詞)に相当する語群は、表1のように分類した。

このような手順で2,347語を分類し整理したものが、表2である。

表1 音声調査結果の一例

カタカナ表示	アクセント習得法則番号	調査語表記	調査アクセント	公開アクセント	支持率	A/B比	支持率順
1 和語の単純名詞							
1.1 平板型から頭高型へ							
アズサ	01	梓	◎/①/許②	◎&①&②	08.3 / 95.8 / 04.2	0.1	B-A-C
ヒエ	01	稗	◎/①/新②	◎&①	12.0 / 80.0 / 40.0	0.2	B-C-A
ヤンマ	01	やんま	◎/新①	◎	20.8 / 70.8	0.3	B-A
シミズ	01	清水	◎/新①	◎	66.7 / 70.8	0.9	B-A
ミナミ	01	ミナミ(大阪の地名)	◎/新①	◎	04.3 / 95.7	0	B-A
1.2 中高校から平板型へ							
マサカリ	01	まさかり	②/◎	②&◎	13.0 / 100	0.1	B-A
1.3 尾高型から平板型へ							
イクサ	01	いくさ(戦)	③/◎	③&◎	36.0 / 96.0	0.4	B-A
カブリ	01	かぶり(～を振る)	③/①/◎	③&①&◎	78.3 / 17.4 / 87.0	4.5	C-A-B
1.4 尾高型から頭高型へ							
キス	01	きす(鯨)	②/①	②&①	33.3 / 95.2	0.3	B-A
チチ	01c	父	②/①	②&①	58.3 / 95.8	0.6	B-A
クス	01c	くす	②/新①	②	70.8 / 95.8	0.7	B-A
チチ	01c	ちち(乳)	②/①	②&①	73.9 / 87.0	0.8	B-A
1. N 現行の規定で大きな支障のないもの							
ココロ	01c	心	②/③	②&③	87.0 / 78.3	1.1	A-B
クマ	01	くま(熊)	②/新①	②	84.0 / 52.0	1.6	A-B
ガンマ	01	がま(植物の蒲)	①/◎	①&◎	68.2 / 31.8	2.1	A-B
ホーキ	01	ほうき	◎/①	◎&①	87.0 / 30.4	2.9	A-B
ガンマ	01	がま(かえるの蝦蟇)	①/◎	①&◎	87.5 / 29.2	3	A-B
クマ	01	くま(黒ずんだところ)	②/新①	②	100 / 25.0	4	A-B
ヨワイ	01	よわい(齢)	◎/②	◎&②	91.3 / 21.7	4.2	A-B
ウダツ	01	うだつ	◎/①	◎&①	100 / 08.3	12	A-B
ミナミ	01	南(方角)	◎/新①	◎	100 / 04.3	23.3	A-B
ツツジ	01c	つつじ	②/◎/新①	②&◎	68.2 / 68.2 / 27.3	1	A-B-C

カタカナ表示=調査語のカタカナ表示(複数掲載のものは第1語形に関する調査結果)
 アクセント習得法則番号=『新明解日本語アクセント』の「アクセント習得法則」分類番号
 調査語表記=調査語としてアナウンサーに画面上で提示した語形
 調査アクセント=今回調査したアクセント型(現行で公開アクセントに含まれていない型は「新」と表示)
 (現行で()付きで掲載されている型は「許」と表示)
 公開アクセント=現行アクセントに掲載しているアクセント型
 支持率=それぞれのアクセント型に「○」と回答したアナウンサーの割合
 A/B比=「調査アクセント」の第1アクセント(A)を分子、第2アクセント(B)を分母としたときの比
 支持率順=「調査アクセント」を「ABC…」としたときの、支持率の順序
 「要検討語」に該当するものにアミカケを施した

表2 音声調査結果の傾向(分類一覧・分布)

法則 番号	平⇒頭	平⇒中	平⇒尾	頭⇒平	頭⇒中	頭⇒尾	中⇒平	中⇒頭	中⇒尾	中⇒中	尾⇒平	尾⇒頭	尾⇒中	「分離」 関連	平板型 衰退	頭高型 衰退	中高型 衰退	尾高型 衰退	要検討項目 (小計)	現行の規定で 大きな支障の ないもの	総計
1	5						1				2	4							12	10	22
2		3	1	2			7				10	1	4			1	2		31	12	43
3	2	1						1										4	4	3	7
4	1	9		25	2	1	69		1	3	9	1			1	3	6		131	46	177
5		13		3	4	2	44	1		8	37	2	7		1	2	2		126	53	179
6				6		1													7	0	7
7	36	2		33			3	6			2	15			2	9	2	1	111	74	185
8	52	11		55	2		36	18		3		1			14	8	8		208	155	363
9	4	6		25	3		14	14		5					6	3	2		82	65	147
10	3	1		1															5	2	7
11	1			1															2	0	2
12		25					29			28	1						5	2	90	50	140
13		11					29			7							4		51	32	83
14	1	19					53		1	4			1		2		22		103	75	178
15		4					8	1		10					1	1			25	36	61
16								2		7					1		1		11	9	20
17		2					3			7					1		2		15	11	26
18	2	4		3	4		7	4						1	2				27	9	36
19		1		1	1		8	4	5	8				1	1		1		31	15	46
32																			0	1	1
33	1						1	1		9									12	3	15
34	2						1	3		1							2		9	5	14
35										1									1	1	2
36										1									1	0	1
38														2					2	0	2
39		3			3			1	1	1				4					13	1	14
43	1	8					3			1									13	19	32
44		7					5												12	10	22
45		77					4			8					13		4		106	60	166
46		9																	9	4	13
47		4					1												5	9	14
48																			0	5	5
49		2			1				1	1							1		6	3	9
52		10							1										10	2	12
53		6																	6	4	10
54		1								1									2	11	13
55		1		1	1			1		1							2		7	7	14
57				1			3	7											11	4	15
58																			0	1	1
59		1			1		2			4				3					11	1	12
61		1		1			2	2		1									7	2	9
62								1											1	0	1
63								1											1	1	2
64				3	1										1				5	2	7
65	1																		1	0	1
66																			0	2	2
67	2	4		2	2		6	1											17	12	29
68	1	1		1			2												5	1	6
69					1									1					2	1	3
71				1															1	0	1
73																			0	1	1
74										2									2	0	2
77																			0	4	4
78		1																	1	0	1
83																			0	2	2
91	2	1		4			5			3				1					16	10	26
92	2	7					1			1									11	4	15
93					1		3	2		1	1								8	4	12
94		4			1		7	4					4	1					21	5	26
95							6				1		1						8	7	15
96		1					1						1						2	2	4
97		1			2		2							19					24	9	33
98		2				2	2	1						5					12	3	15
99		3					1			2				4					10	4	14
計	116	270	1	169	30	6	369	77	8	129	63	24	17	42	46	28	65	3	1463	884	2347

2 「要検討語」の特徴

まず「要検討語」について、「アクセント習得法則」分類の観点から、件数順（要検討項目の計）の「ベスト10」を見てみる。

ここで、表3の見方を説明する。

アクセントは丸数字で示し、現行アクセント辞典の掲載順序のとおり示した。丸数字の後の数値が「支持率」である。たとえば、「乾めん」は現行アクセント辞典では第一アクセントとして平板型[/カンメン→]が掲げられ、その次に第二アクセントとして頭高型[カ\ンメン]が示されている。今回の調査でそれぞれの音声各回答者（アナウンサー）に聞かせたところ、平板型[/カンメン→]の支持率（＝「○」と回答した率）は0%であったのに対して、頭

高型[カ\ンメン]の支持率は100%であった、というようになっている。なお、たとえば「渦中」については、平板型[カ/チュー→]で適否を問い、また別の設問として頭高型[カ\チュー]について尋ねているので、両者の支持率の合計が100%を超えるところもある。つまり、両方のアクセント型に対して「○」と答えた人がいるということである。

このように、今回の調査結果から考えると現行アクセント辞典の記載に検討を加えたほうがよいと思われる語が、法則番号「8」のものとして208語が挙げられることになる。

表2と表3をあらためて語種別にまとめなおし、名称を付け直したものが表4である。以下に説明を加える。

表3 「要検討語」ベスト10

順位	法則番号	パターン	語数	語例（現行アクセント辞典掲載型【1】内は現行非掲載、「許」は許容型）および支持率
1位	8	後部が漢字一字二拍（漢字音）の癒合名詞	208	乾めん（◎0①100）、きゅう覚（◎4.2①95.8）、渦中（◎8.0①100）、代金（◎8.7①100）、沸点（◎12.5①95.8）、入道（①4.8◎100）、しょうりょう（精霊）（①8.3◎79.2）、非道（①12.0◎100）、遺恨（①16.0◎100）…
2位	4	名詞+和語名詞の癒合名詞	131	しばえび（◎33.3②95.8）、底値（◎29.2②95.8）、いがぐり（◎52.2②100）、てやり（手槍）（①4.5◎100）、小づめ（①8.0◎84.0）、手縄（①8.7◎73.9）、福耳（②16.7◎87.5）、山かご（②20.8◎91.7）、炭火（②26.1◎100）…
3位	5	動詞・形容詞などの和語の癒合名詞	126	あまだい（◎21.7②95.7）、負け星（◎28.0◎84.0）、舞姫（◎37.5②95.8）、肝吸い（◎47.8②78.3）、深爪（②0◎95.5）、下げ緒（②4.5◎63.6）、板付き（②16.7◎95.8）、打ち綿（②13.0◎78.3）、冷や麦（③36.0②88.0）…
4位	45	動詞+動詞の結合動詞	106	見やる（◎31.8②90.9）、見舞う（◎65.2②91.3）、成り行く（◎28.6③95.2）、彫り込む（◎34.8③100）、射殺す（◎26.1③72.7）、出し抜く（◎36.0③100）、植え替える（④77.3③81.8）…
5位	14	後部が漢語一字の結合名詞	103	無頼漢（◎20.8②91.7）、自画像（◎48.0②96.0）、紀行文（◎50.0②87.5）、時間外（◎70.8②95.8）、如意棒（②36.4◎95.5）、予備金（②36.4◎95.5）、二次会（②44.0◎84.0）、日本史（②37.5◎79.2）、機関砲（②45.5◎90.9）…
6位	12	後部が和語名詞でできた結合名詞	90	うなぎめし（◎12.0③100）、ひのえうま（◎12.5③91.7）、五目飯（◎16.0③100）、回り道（◎24.0③100）、万葉がな（◎16.7③87.5）、小田巻き（②4.8◎42.9）、獅子舞（②47.8◎100）…
7位	9	外来語の単純名詞	82	アーメン（◎9.1①86.4）、ペーパー（◎62.5①83.3）、メタル（◎32.0【①88.0】）、オーボエ（①22.7◎95.7）、キルティング（①30.4◎95.7）、モップ（①25.0◎100）、シールド（①36.0◎88.0）…
8位	13	後部が動詞・形容詞などでできた結合名詞	51	頭痛持ち（◎44.0②96.0）、布団蒸し（◎45.5②63.6）、気変わり（◎65.2②82.6）、首くくり（◎39.1③78.3）、お召し替え（②41.7◎87.5）、日めくり（②65.2◎78.3）、二枚落ち（②21.7【◎82.6】）…
9位	2	転成名詞-動詞からのもの	31	支え（③72.0◎56.0許②64.0）、出しゃばり（◎40.9③100許④59.1）、またたき（瞬き）（③31.8④22.7◎95.5）、賄い（③48.0◎88.0）、偽り（④40.0◎92.0許③40.0）、ほころび（④20.8◎100③29.2）、驚き（④32.0◎92.0③12.0）、強がり（④37.5③95.8許◎41.7）…
9位	19	接合名詞	31	かのと（②13.0◎56.5）、このわた（②26.1◎87.0）、麻の葉（③8.3◎83.3）、目の下（②0①100）、湯の花（②20.8①95.8）、がまの油（④4.3◎43.5【①78.3】）、とりの市（④12.0③100）、のみの市（④16.0③96.0）…

表4 語種別の再分類

a. 和語の単純名詞 (法則番号「2」)			
	語数		語数
平板型⇒	4	⇒平板型	19
頭高型⇒	3	⇒頭高型	7
中高型⇒	9	⇒中高型	1
尾高型⇒	15	⇒尾高型	2

b. 後部要素が和語の複合名詞 [4拍以下] (法則番号「4」「5」)			
	語数		語数
平板型⇒	25	⇒平板型	187
頭高型⇒	42	⇒頭高型	5
中高型⇒	134	⇒中高型	46
尾高型⇒	56	⇒尾高型	4

c. 後部要素が和語の複合名詞 [おおむね5拍以上] (法則番号「12」「13」)			
	語数		語数
平板型⇒	36	⇒平板型	59
頭高型⇒	0	⇒頭高型	0
中高型⇒	102	⇒中高型	71
尾高型⇒	3	⇒尾高型	0

d. 後部要素が一字漢語の複合名詞 [4拍以下] (法則番号「8」)			
	語数		語数
平板型⇒	77	⇒平板型	91
頭高型⇒	65	⇒頭高型	71
中高型⇒	65	⇒中高型	16
尾高型⇒	1	⇒尾高型	0

e. 後部要素が一字漢語の複合名詞 [おおむね5拍以上] (法則番号「14」)			
	語数		語数
平板型⇒	22	⇒平板型	53
頭高型⇒	0	⇒頭高型	0
中高型⇒	80	⇒中高型	24
尾高型⇒	1	⇒尾高型	1

f. 外来語単純名詞 (法則番号「9」)			
	語数		語数
平板型⇒	16	⇒平板型	39
頭高型⇒	31	⇒頭高型	28
中高型⇒	35	⇒中高型	14
尾高型⇒	0	⇒尾高型	0

g. 複合動詞 (法則番号「45」)			
	語数		語数
平板型⇒	90	⇒平板型	4
頭高型⇒	0	⇒頭高型	0
中高型⇒	16	⇒中高型	85
尾高型⇒	0	⇒尾高型	0

h. 接合名詞 (法則番号「19」)			
	語数		語数
平板型⇒	2	⇒平板型	9
頭高型⇒	2	⇒頭高型	4
中高型⇒	26	⇒中高型	10
尾高型⇒	0	⇒尾高型	5

※なお、たとえば表2での「頭高衰退」は「頭高⇒」に算入した。

a. 和語の単純名詞 (「2」)

この類型では、左側の欄では「尾高型⇒」が15例(尾⇒平が10例, 尾⇒頭が1例, 尾⇒中が4例)と最も多い。つまり、現行アクセント辞典で第一アクセントが尾高型になっている語に、

要検討のものが多いということである。

「尾高型⇒」の15例は、「偽り, ほころび, 驚き, 試み, 預かり, あやつり(操り), 表れ, 扇, もやし, 契り, 卸, 強がり, 集まり, 誤り, 備え」である。以上の語は、現行アクセント辞典での

第一アクセントは尾高型であるが、今回の音声調査の結果では尾高型の支持率が相対的に低かったのである。

一方右側の欄では、「⇒平板型」が19例（頭⇒平が2例，中⇒平が7例，尾⇒平が10例）と最も多い。「⇒平板型」の19例は、「たぐい，みやび，またたき（瞬き），賄い，へつらい，贖い，繕い，あつらえ，祝い，偽り，ほころび，驚き，試み，預かり，あやつり（操り），表れ，扇，もやし，契り」である。以上の語は，平板型が現行アクセント辞典では第一アクセントとしては掲げられていないが，調査結果では平板型が最も支持率が高くなっているものである。

この類型に関しては，現行の第一アクセントである尾高型の支持率が低下し，平板型への支持率が高まりつつあると言える。

b. 後部要素が和語の複合名詞

[4拍以下]（「4」「5」）

この類型では，左欄で最も多い「中高型⇒」の語例として「福耳，山かご，炭火，くまざさ，靴墨，種火，のりしろ，石灰，小麦，ひめます（姫鱈），深爪，下げ緒，板付き，打ち綿，黒髪，しらかみ（白紙），とじぶた，切り株，飛び魚，いとくり（糸繰り），取りかじ，夜ばい，いきえ（生き餌），そば切り，荒海，入り海，張り板，ひきうす，ふみうす（踏み臼），より糸」などが挙げられる。これらは同時に，右欄で最多の「⇒平板型」にも該当している。

この類型では，現行第一アクセントの中高型から，平板型への支持が高まりつつあると言える。

c. 後部要素が和語の複合名詞

[おおむね5拍以上]（「12」「13」）

この類型では，「平板型⇒中高型」と，「中

高型⇒平板型」および「中高型⇒中高型」というパターンが多い（表2参照）。最後の「中高型⇒中高型」というのは，たとえば「中高型④⇒中高型③」や「中高型③⇒中高型④」など，同じ中高型どうしであってもアクセント核の位置が異なる形になっているパターンのもをすべてまとめたものである。今回はこのような集計方法を採用したため，「中高⇒」と「⇒中高」が同等に多いという一見奇妙な結果になっているのである。実際には，「中高型⇒平板型」が58例，「平板型⇒中高型」が36例，「中高型⇒中高型」が36例である。

「中高型⇒平板型」の例には，「小田巻き，獅子舞，仕手株，雇い主，板屋根，擬じ針，独り身，まんどころ（政所）」などがある。

「平板型⇒中高型」の例としては，「うなぎめし，ひのえうま，五目飯，回り道，万葉がな，男坂，とろろ芋」などがある。

「中高型⇒中高型」の例には，「やみ取り引き，うまぬすびと（馬盗人），大ぶろしき（以上③⇒④），からす麦，通り雨，ベニヤ板（以上④⇒③），左うちわ，おぼろ月夜，相合い傘（以上⑤⇒④）」などがある。

d. 後部要素が一字漢語の複合名詞

[4拍以下]（法則番号「8」）

この類型では，左欄の数値としては「平板型⇒」が77例と最も多いものの，「頭高型⇒」が65例，「中高型⇒」が65例とさほど差が大きい。それに対して右欄では，「⇒平板型」が91例とかなり集中している。全体として平板型への支持が高まりつつあると言えそうである。

「平板型⇒頭高型」の例として，「乾めん，きゅう覚，渦中，代金，沸点，林業，火中」などがある。

「頭高型⇒平板型」としては、「人道、しょうりょう(精霊)、非道、遺恨、けんだい(見台)、先達、寒行」などがある。

「中高型⇒平板型」としては、「湯せん、裏紋、中幕、高堀、喜色、くけ台、投げ銭」などが挙げられる。

e. 後部要素が一字漢語の複合名詞

【おおむね5拍以上】(「14」)

この類型では、「中高型から平板型へ」という傾向が比較的はっきりとあらわれている。

「中高型⇒」の例としては、「如意棒、予備金、二次会、日本史、機関砲、木戸番、模擬店、師範代、未定稿、自治会、自衛艦、木戸銭、許可証、指南役、健忘症、悔やみ状、産婆役、担保品、拘引状、随意筋、大病人」などがある。これらは同時に「⇒平板型」の例でもある。

f. 外来語単純名詞(法則番号「9」)

この類型でも「中高型から平板型へ」という傾向が比較的はっきりしており、「中高型⇒平板型」の例として「スパーリング、ドラフト、カナキン、トリミング、ウイング(サッカー用語)、ナレーション、スニーカー、マネージャー、リポーター、プレーヤー(再生機)」などがある。

いわゆる「外来語の平板化」を裏付けるような傾向になっている。

g. 複合動詞(法則番号「45」)

「平板型⇒中高型」というものが圧倒的に多い。例として「見やる、見舞う、成り行く、彫り込む、射殺す、出し抜く、かつ込む、上げる、見飽きる、持ち帰る、出っ張る、受け継ぐ、切れ込む、とじ込む、見立てる、見開く、勝ち越す、勝ち抜く、繰り越す、締め込む」などがある。

h. 接合名詞(法則番号「19」)

中高型としてのアクセント核の位置の違いが多く、「とりの市、のみの市、このとき、あのとき、ふきのとう(以上④⇒③)、その節、そのもの(以上②⇒③)」などがある。

3 アクセント記号の変更について

今回のアクセント辞典では現行アクセント辞典での表記法である「音調の高い部分に上線を引く」という方法を採用しないということが、第2回アクセント委員会(2008年夏)で決定されている。今回の委員会では、この理由と背景をあらためて説明した。そして、当面は“/”“\”および“→”という記号を用いることで最終的にはおおむね合意が得られた。

“/”は、音調が高くなりはじめるところを示すものである。

“\”は、アクセントの下がり目を示すものである。

“→”は、その語が平板型であることを示すものである。

今回のアクセント表記法は、現行の表記法では書き表せない音調パターンも、示すことができる。

- ・<現行> トリモ・ナオサズ
⇒ <新表記> /ト\リモ・ナ/オ\サズ
- ・(現行方式では表記不能)
⇒ /ト\リモナオ\サズ
- ・ヨム・ラジ
⇒ /ヨ\ム・ラ/シ\イ
(ただし不適切なアクセント)

・(現行方式では表記不能)

⇒ /ヨ\ムラシ\イ

(適切なアクセント)

今回の改訂では、アクセント辞典の本文中に掲げた用言(一部)について活用形を明示することを目指しており、その際にはこのアクセント表記法の採用が不可欠である。

4 委員からの意見

ここまでの事務局からの報告・説明(塩田による)に対して、今回の調査結果を元に改訂作業を進めるということに関して、アクセント委員からの了承がおおむね得られた。

意見として、以下のようなことが指摘された。

○今回のアナウンサー調査の結果は最大限尊重すべきである。厳密な方法で実施されており、現状をかなり正確に反映しているはずである。

○この結果に基づいて、アクセント辞典の記述内容を思い切って整理してみてもよいのではないか。NHKのアクセント辞典は、単なる「伝統重視」ということよりも、「現代人の考える規範意識」を重視したほうがよい。また、「伝統重視」に対抗しうる論理の構築をすすめておくべきであろう。

○一般に「標準語アクセント」と言った場合、伝統的な型に軸足を置きつつ新しい型も認める、といった態度として受け止められる。しかし今回は必ずしもそうではない(「伝統重視」だけではない)ということ、きちんと明言しておいたほうがよいだろう。

○アクセント辞典を引く人の中には、「ここに載っていないアクセントは日本語としておかしい」という意識の人もあるようだが、これは望ましくな

い。今回のアクセント辞典の編集にあたっては、「放送関係者の申し合わせ事項としてこのように定める」といったような姿勢で臨んでみてはどうだろうか。

○「占い」を例に取り上げてみる。

「占い」は現行アクセント辞典での掲載が[ウ/ラナイ→, ウ/ラナ\イ]となっているのに対して、今回の調査結果では、平板型[ウ/ラナイ→]が支持率92.0%、中高校型[ウ/ラナ\イ]が8.0%となっている。

このような場合、支持率が極端に低い中高校型[ウ/ラナ\イ]を削除するかどうか、また削除する基準となる数値は10%以下ということでのよいのか、あるいはもう少し高い数値のところにするのか、といったことを、一度議論しておく必要がある。10%だから削除する、あるいはしない、と単純に数値だけで考えるのはやや危険である。

「占い」は動詞「占う」から転成した名詞である。元になる動詞「占う」が中高校型である以上、そこから転成した「占い」についても本来は中高校型であるわけだから、これは安易に削除してはならないという考え方もあるはずである。

○アクセントの優先順位を明確に示すために、第一アクセントと第二アクセントとで、活字の大きさを変えるとといった工夫があってもよいのではないか。できれば、今回の調査結果自体を反映させるのが望ましい。

(しおだ たけひろ)

アクセント辞典改訂専門委員会(第4回)

【開催日】平成22年2月19日(金)

【場所】NHK放送文化研究所会議室

【出席者】水谷 修氏、井上史雄氏

上野善道氏、相澤正夫氏

梅津正樹(アナウンス室)

杉原 満(文研)ほか